

私立高等学校の生徒募集戦略 —女子大学附属高等学校のパンフレット分析—

Strategies for Recruiting Students at Private High Schools : Analysis of “School Brochures” Issued by High Schools Attached to Women’s Colleges/Universities

安東 由則* ・ 橋詰 啓子**

ANDO, Yoshinori & HASHIDUME, Keiko

目次

はじめに：研究の背景と目的

1. 私立男女別学高校を取り巻く現状
2. 先行研究
3. 女子大学併設（附属）高校「学校案内」の分析
（1）調査目的・方法および研究視点
（2）「学校案内」パンフレットの集計結果と分析
4. まとめと課題

注

引用文献

* 文学部教育学科・教授／教育研究所・研究員

** 教育研究所・助手

はじめに：研究の背景と目的

本研究は、教育研究所の特別研究「私立中学・高等学校の動向とサバイバル戦略」の一環として取り組む共同研究である¹。この特別研究の目的は、第二次ベビーブーム後、学齢人口が減少する中で、私立学校はどのような動きをしてきたのかを示すデータを作成するとともに、進学率の上昇が望めない中でどのようにして新たな存在意義を提示して、生徒を獲得し、サバイバルを図ってきたのか、また図ろうとしているのかを探ることである。これを通じて、本学の附属中高のみならず、私立の中学・高校の学校運営に示唆を提示することができると思う。

少子化が進行し、出生率はや出生者数の減少にはなかなか歯止めがかからない。2016年に生まれた出生数は97万6979人となって100万人を下回り、特殊出生率は1.44にすぎず²、1990年代から様々な施策（エンゼルプラン、新エンゼルプラン、子ども・子育て応援プランなど）が実施されてはいるが、なかなか出生率は上昇していない。大学においては18歳人口がさらに減少する中、定員割れを起こす私立大学が4割を超すなど（日本私立学校振興・共済事業団、2016）³、大学のサバイバルが叫ばれるようになっている。2018年には18歳人口の減少幅が大きくなることから、「2018年問題」などとも呼ばれてきた。当然、私立高校ではその3年前から、私立中学では6年前から入学年齢人口の減少にさらされている。よって、私立中学・高等学校において、生徒募集はサバイバルをかけた逼迫した問題となっているのである。大学とは異なり、高校進学率は98%を超えた飽和状態で、これ以上伸びる見込みはないのであるから、なおさら私立高校の生徒募集は深刻なものとなる。これに加えて近年、私立高校の授業料支援をかなりの程度おこなう自治体も増えてはきているが限定的であり、授業料負担という面において、私立学校に通うことによる経済的負担は大きく、生徒募集において不利な面は否めない。

私立高校は、様々な面で公立以上にバラエティに富む。入試難易度や設置学科では公私ともに幅広いが、私立の設置者は宗教団体から個人まであり、必然的に設立目的も多様である。学校の経済的基盤や学校規模の差も大きい。また、女子校・男子校といった別学は圧倒的に私立に多く、設置形態も中学校・高等学校の6年一貫教育であったり、小学校からの12年一貫、小学校から大学まで16年、あるいは中学校から大学までの10年であるなど実に様々な形態がある。こうした多様な背景をもつ私立高校が、どのようにしてサバイバルを図っているのかを探る手段の一つとして、本研究では各高校が毎年配布している『学校案内（パンフレット）』に着目した。それには、各学校が受験生やその保護者、中学教員らに対して、各校の何をアピールポイント（有名進学大学、推薦入学、カリキュラム、コース、宗教、施設、学校行事、留学など）としているかを把握することができるからである。よって、この共同研究の一つの柱は、少子化という厳しい環境の中における私立高等学校のサバイバル・ストラテジー（Survival Strategies）を明らかにすることに

ある。

本論文では、女子大学併設高校（附属高校を含む）を対象とする。その理由の一つは、本学が女子大学であり、附属高校をもっているということである。これに加えて、今後、対象高校を広げて分析を進めていくにあたり、数が限定され、ある程度同質的な女子大学併設高校を対象に試行することで、分析の枠組みを固めていくということもある。

残念ながら、今回の研究においては10年前、20年前の資料をもたないため、女子大学併設（附属）校において育てたい人間像やカリキュラムの変化、併設大学との関係や大学進学についての捉え方の変化を把握することができない。よって、現時点における考え方、取り組みを分析することとなる。時系列比較については今後の課題とする。

1. 私立男女別学高校を取り巻く現状

私立の男女別学高等学校をとりまく状況を概観すると、その現状は厳しい。高等学校においても共学化が進行しており、2000年以降の首都圏では、早稲田実業（2002年）、早稲田大学本庄（2007年）、明治大学附属明治（2008年）といった伝統的な男子校が共学化していった。さらに2016年には男子校の法政大学第二が共学化し、法政大学女子は2018年より法政大学国際となって共学化する。女子校から改称・共学化したかえつ有明（2006年—嘉悦女子より）や広尾学園（2007年—順心女子学園より）などは、その後、大学進学実績を伸ばし、入試難易度を大きく上げた。関西でも、2005年に啓明女学院高等学校が啓明学院高等学校となって共学化し、男子校であった関西学院高等部は2017年度から完全共学化した。この他、関西有数の進学校である洛南が2006年に、同じく高槻が2017年に男子校から共学へと切り替えた。少子化が進行し、受験生の共学志向が強くなっていると言われる近年、別学から共学化する中学・高等学校は確実に多くなっており、進学実績のある男子有名進学校も女子受験生を集めるようになってきた⁴。男子の有名進学校からも女子は有望な募集対象になってきたのであり、そうならざるを得なかった。

兵庫県と大阪府における私立高校の共学化の傾向を図示したのが図1と図2である。1955年から2015年まで5年ごとに、共学校数の推移を線で、女子校、男子校それぞれが直前の5年間に共学化した数の累計を棒で示している。いずれも、1990年頃までは男女別学が多かったのであるが、1990年代に入ると共学化する学校が増加していき、2000年代になるとさらに加速した。兵庫県における、2015年の共学校数は、1990年の2倍になり、私立高校52校中、共学校の割合は44.2%

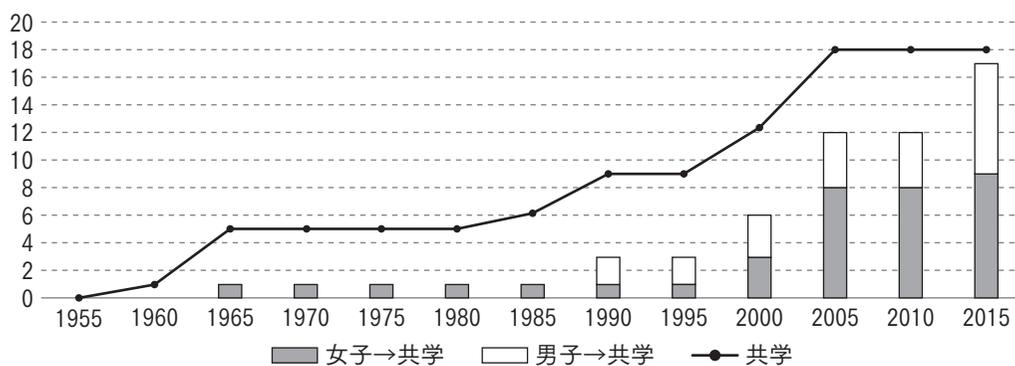


図1. 共学校数と共学化校数（累積）の推移（兵庫県）

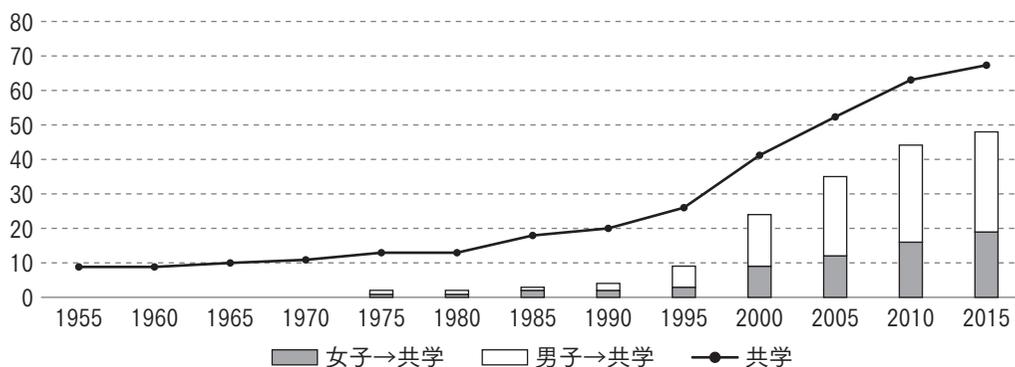


図2. 共学校数と共学化校数（累積）の推移（大阪府）

（出典：図1、図2とも、『全国学校総覧』各年、原書房（東京教育研究所））

となった。同じく大阪府では、2015年における共学校数は1990年に比べて2.5倍近くに増加し、私立高校95校に占める共学校の割合は70.5%まで上昇している。兵庫県はまだ別学の高校の方が多いが、大阪府では共学校が7割を占めるまでになっており、特に1990年代後半以降、男子校からの共学化の流れが強くなったことが分かる。

このような中、女子校、とりわけ女子大学併設（附属）の高等学校（あるいは中高一貫校においては中学校）においては、受験生集めが厳しくなっていると推察される。私立女子大学73校中、66校に併設高校があり（安東 2007, 479-480頁の資料3を基に再確認）、かつては、併設の女子大学までの一貫教育、エスカレーター式の進学を売りにして生徒募集をできていたものが、通用しなくなってきた。なぜなら、女子の4年制大学進学率は大きく伸び（1990年：15.2%、2000年：31.5%、2016年：48.2%）⁵、その進学学問領域も、女子大学に多くあった人文系学部や家政系学部への進学から、社会科学系、医療系、理科学系へと多様化し、共学志向が強くなっているからである。こうした現状に

あって、生徒募集で一層厳しい状況に置かれている女子大学併設（附属）高校がどのように自校を特徴づけ、何を受験生にアピールしているのか、その際、併設女子大学への進学、他大学への進学をどう位置付けているかを明らかにし、その生き残り戦略を把握する。

2. 先行研究

私立高校のサバイバル・ストラテジーを真正面から取り上げた学術研究は、管見においてあまり見当たらない。例えば、『日本私学教育研究所紀要』において、「私立学校をとりまく諸事情と今日的課題」や「公立高校のコース編成と私学の対応」などがあり、『月刊高校教育』では「私学におけるマーケティングを考える」、「特色ある、個性ある私学」の連載の他、私学の特色ある教育をPRしていることがある（以上、安東 2016）。しかしながら、これらは短い論文あるいは記事がほとんどで、むしろ、中学や高校の受験雑誌・商業雑誌（『週刊ダイヤモンド』や『プレジデントファミリー』など）、あるいは商業書籍（漆 2010；田野瀬 2015 など）において、特色あるカリキュラムや進学実績の伸びた学校の成功事例が紹介されている場合が多く、学術レベルで分析されている研究はあまりない。

次に、パンフレットを分析対象とし、その言説を分析している研究についても検索したが、高校のパンフレット分析については、見つけることができなかった（安東 2016 参照）。ただ、大学のパンフレットやHPに言説に注目した先行研究はいくつかある。大阪女子大学のゼミで行った研究（井上他、1996）では、女子大学のパンフレットを資料として、そこに現れた言説や写真を対象として分析することを通して、どのような「女子大イメージ」が作り上げられているのかを、多面的に、詳細に明らかにしている。佐野（2002）は、女子大学のパンフレットを分析対象とした研究であるが、大学のマーケティングという視点から数量的に分析し、特色と属性の関係を検討しているが、そこに現れた内容解釈という視点はない。森山（2005）は、紙媒体のパンフレットではなく、大学の宣伝、受験生へのアピールに積極的に使用されるようになったウェブ上の大学HPに着目し、そこに掲載された学長メッセージのみを対象としてジェンダーの観点から言説の分析を行ったものである。安東・鎮（2008）の研究も、女子大学を対象としたもので、先述の井上らによる研究を参照しながら、女子大学が“女子大学”をどう自己規定しているのかを言説から探っている。分析の対象は、学生募集用のパンフレットと、『自己点検・自己評価報告書』に現れた言説であり、そこから女子大学の存立意義や女子教育の意味付けなどを明らかにしようとした。橋本ら（2017）は、上記の研究は対象が限定されていたり、記述的な分析にとどまっているなどの課題があるとして、総合的な視点から、計量的・客観的に言説の分析を行った。女子大学70校と女子大学から共学化した45校のHP

に掲載された「学長メッセージ」の言説を分析対象とし、そのテキストデータをコード化したものを数量的手法を用いて分析を行ったものである。学長メッセージの言説内容（自己認識）が大学属性などによってどのような差異があるかを、数量的に明らかにしようとした意欲的な研究である。

以上のように、先行研究では高等学校のパンフレットやHPと対象とした研究は少ないようだが、大学、特に女子大学のパンフレットやウェブ上のHPにある言説を分析対象とした研究はいくつか見られた。テキストを対象としながら、高度な数量的分析を取り入れるなど様々な分析が行われるようになってきている。しかしながら、数量的な研究は全体の傾向はつかめるものの、記述内容の吟味・解釈まで入っていくことはできない。当然のことながら、どちらが優れているとは言えず、研究目的に沿った方法を取ることになる。本稿ではこれまであまりなされていない私立高校のパンフレットを対象とする研究であり、最初のステップとして、まずパンフレットの概要（構成内容や特徴）を把握し、今後、共学校を含めた分析につなげることをしたい。

3. 女子大学併設（附属）高校「学校案内」の分析

（1）調査目的・方法および研究視点

最初にも述べたように、私立中学・高等学校を取り巻く諸状況が大きく変化する中で、「私立中学・高校は、今日どのような経営戦略をもち、この大競争時代を生き抜き取り組みを行っているのか、その現状をまとめ、分析することを通じて、今後の私立中学・高校の教育や経営に役立てていく」という目的で、この調査研究を始めた。生徒募集のために毎年作成される「学校案内（以下、パンフレット）」には、建学理念を念頭に、現代の私立中学・高校での取り組みをまとめたものであり、その紙面を通じて受験生および保護者に向けてアピールしたいポイントや特徴（カリキュラム、学校行事、学校生活、受験・進路指導など）を明確に示している。したがって「学校案内」を分析することは、現在の私立中学校・高等学校の状況や姿勢や特徴とともに、今後の時代に即した改革への取り組みを知ることができる資料であると考え、これを分析対象とした。

調査対象の範囲は、近畿地区では兵庫県、大阪府、京都府の私立中高のすべて190校、全国の私立中高では、北海道から九州地区（近畿を含まず）の女子大学併設中高（以下では、基本的に併設を主として使用する）25校と設定し、これらの学校に研究の趣旨を記した依頼書と返信用封筒を送付した。私立高校の資料収集期間及び回収率は以下の通りである（併設高校からの返送はなく、併設中学校からのみ返送があった3校については、今回の返送数には含めていない）。

資料収集期間：2015年7月1日～7月31日

(今回の研究では、期間後に返送されてきたものについても調査対象に含めた)

回収率：発送 215校 (うち近畿地区 190校、近畿外の女子大学併設 25校)

返送 146校 (うち近畿地区 125校、近畿外の女子大学併設 21校)

回収率 67.4% (うち近畿地区 65.8%、近畿外の女子大学併設 84.0%)

送付依頼をして返送された私立高校 146校の他、返送されてこなかったが本研究において収集が必要と考え個別に資料請求をした 12校 (うち、女子大併設 5校：近畿 4校と近畿外 1校) を合わせた 158校が調査対象である。本論文については、その中でも私立女子大学併設高校 35校 (近畿 13校：近畿地区 8校+個別請求 4校+武庫川女子大附属 1校/近畿以外 22校：近畿以外 21校+個別請求 1校) を対象として分析する。

本論文においては、女子大学併設高等学校に対象を定めたので、以下の点から学校案内パンフレットの分析を行う。まず、①対象校の属性およびパンフレットの概要を確認した後、②見開きと教育方針のキャッチフレーズ (コピー) の特徴、③パンフレット全体の特徴、④併設大学の紹介や進学状況、⑤女子教育の意義、の 5点である。なお、学校案内とともに送付された別冊資料等からも必要情報については分析に含めている。

(2) 「学校案内」パンフレットの集計結果と分析

1) 対象校およびパンフレットの概要

上記手続きによって回収された女子大学併設 (附属) 高校のパンフレット (2015年作成の 2016年度版) は 35部で、建学の精神、教育理念、沿革、カリキュラム、進路状況、学校生活、校長・教員のメッセージ、卒業生のメッセージ、系列大学などについて掲載されている。これらの学校名は、「資料」として論文末に掲載している。パンフレットのサイズは全て A4版であり、高校のみを 1冊にまとめている学校がほとんどであるが、入試情報、進路状況、新設コースなどを別冊やチラシとして作成し、パンフレットに添付している学校 (15校) もあった。

分析対象となった学校の属性を見ていく。所在地域では、東京が最も多く 12校、次に京都 6校、兵庫 5校である (表 1)。大学以外の併設学校をみると、中学は 35校全てにあり、短大は 11校であった。小学校を併設する学校もあるが、この表には掲載していない (表 2)。ただ、本サンプルの場合、同系列の高校が複数校含まれている (大妻女子や共立女子)。

高校の学科構成では、普通科のみが 31校 (88.6%) と 9割近くを占め、普通科と専門学科の併設は 4校 (11.4%) であった (表 3)。専門学科のコース名は、「音楽科」2校 (福岡女学院、華頂女子)、「ファッションテクニクス」 (和洋国府台女子)、「ウィステリア

科」(京都女子)である。京都女子の「ウイステリア科」は京都女子大学への進学を前提として、「国際社会で活躍できる『京女人』を育成」するとして、文化的な習い事(華道、茶道等)や外国語教育を特色としている。普通科では、進路や文理系などによるコース制をとっている高校が多く、2コースが12校、3コースが10校、4コース以上が2校であった(表4)。その内容については後で検討する。

表1 学校の地域

地域	学校数
北海道	1
宮城	1
埼玉	1
千葉	1
東京	12
愛知	2
京都	6
大阪	2
兵庫	5
広島	2
岡山	1
福岡	1
合計	35

表2 併設学校

併設学校	学校数	%
中学	35	100.0
短大	11	31.4
大学	35	100.0

※全35校中

表3 普通科と専門科

学科編成	学校数	%
普通科のみ	31	88.6
普通科と専門科	4	11.4
合計	35	100.0

表4 普通科コースの数

コース数	学校数	%
1コース	11	31.4
2コース	12	34.3
3コース	10	28.6
4コース以上	2	5.7
合計	35	100.0

表5 メッセージ・紹介の有無

メッセージの主	有	%
校長のメッセージ	31	88.6
卒業生のメッセージ	33	94.3
教員メッセージ	11	31.4

※全35校中

パンフレットは、学生や校舎の写真を多用し、視覚的にわかりやすくなっているものがほとんどである。表紙には英語表記があり、見開きは「建学の精神」「学校教育の理念」「校長のメッセージ」などから始まっているものが多い。典型的な構成順としては、「沿革」→「コース紹介」→各「カリキュラム」→「進路指導」・「進路状況」→「教員紹介」「卒業生メッセージ」→「学校生活・クラブ活動」→「設備環境の紹介」という組み立てとなっている。さらに系列大学の紹介や制服の紹介などが盛り込まれているものもある。そのうち、「メッセージ」に限ってしてみると、校長のメッセージは35校中31校

(88.6%)、卒業生のメッセージは 33 校 (94.2%)、教員メッセージや教員の授業紹介については 11 校 (31.4%) で掲載されていた (表 5)。

次に、高校パンフレットの総頁数の分類を表 6 に示している。26~30 頁の分量の冊子が最も多く 22 校、最大は東洋英和女学院と京都光華女子の 42 頁であり、最も少ないものはノートルダム清心の 14 頁、全体の平均頁数は 26.7 頁であった。パンフレットの構成要素が全体の頁数 (平均 26.7 頁) に占める構成比率をみていく。「カリキュラム」「学校生活 (クラブ活動を含む)」「進路」については、平均頁数と比率は、多い順に「学校生活」4.3 頁 (16.1%)、「カリキュラム」は 3.7 頁 (13.9%)、「キャンパスの環境」1.9 (7.1%)、「先輩 (卒業生) のメッセージ」1.7 頁 (6.4%)、「進路」1.7 頁 (6.4%) であった (表 7)。全体の傾向としてクラブ活動や行事を含む「学校生活」の内容に多くの頁を使っており、写真で視覚的に興味を引くように工夫されているものが多い。

表 6 パンフレットの総ページ数

ページ数	学校数	%
15 頁以下	1	2.9
16 ~ 20 頁	3	8.6
21 ~ 25 頁	5	14.3
26 ~ 30 頁	22	62.9
31 ~ 35 頁	1	2.9
36 ~ 40 頁	1	2.9
41 頁以上	2	5.7
合計	35	100.0

表 7 ページ数の比率

トピック	平均ページ数	%
学校生活	4.3	16.1
カリキュラム	3.7	13.9
キャンパス環境	1.9	7.1
先輩メッセージ	1.7	6.4
進路	1.7	6.4

※総ページ数の平均：26.7 ページ

「カリキュラム」については、普通科をコース別にして、学力や目標とする進路に合わせて内容が組み立てられている。コースは文系と理系で分類したり、進学希望の大学別 (国公立大学、難関私立大学、系列大学) などで分類したりしている場合が多い。普通科でのコース分けは、進学大学種別だけでなく、進路分野に応じて多様なコースに分かれている学校もある。平安女学院は 4 コース (アグネスグローバル総合進学・幼児教育進学・エキスパート特進・立命館進学)、樟蔭は 4 コース (特進・進学・児童教育・フードスタディ) などは、学生の進路希望に合わせて特色のあるコースを設けている。

「進路」については、1~2 頁程度であるが、国公立大学や有名私立大学 (早慶や MARCH) の合格数や進学状況を詳細に提示して、併設高校ではあるが他の有名大学への進学実績を大きくアピールしている学校も少なくない。進路指導については、カリキュラムやコースとも密接に関連しているが、「進路」の中で「個別に丁寧な学習指導」を明示している。

2) 見開き頁の内容：アピールポイントの分析

パンフレットの見開きには、キャッチフレーズと共に建学の精神や教育理念、校長のメッセージなどが掲載されている。見開きの頁は最初に目に留まる大事な箇所、学校が強調したいアピールポイントとなっている場合が多い。例えば「凜と輝く自分をつくる」(宮城学院)、「和を深く 洋を広く 私を豊かに」(和洋国府台)、「めざすのは咲き誇る未来」(共立女子第二)などである。教育方針では、学校の教育目標や女子教育の意義を示しており、学校の全体像をイメージさせる効果がある。その「見開き」と「教育方針」にどのような言葉が用いられているかを整理するため、キャッチフレーズに使用されている重要と思われる単語を抽出した(表8)。見開き頁については、同じタイトルで使用している最初の1～2頁を範囲とし、一校より複数の単語を抽出している場合もある。なお、この単語抽出は、筆者(橋詰)とデータ入力補助者の2名で確認を取りながら行った。

表8 見開きと学校方針に見られる単語とその使用回数

言葉	回数
未来・夢	9
女性・女子教育	8
豊か	6
愛・友愛／キリスト教・仏教精神	5
輝く／自立・自律／グローバル／知性	4
精神・清心／理念・伝統／誠実／勤勉／堅実／品格・美しく／学力・勤勉	3
世界／中高一貫／奉仕／可能性	2
真理／真実／サイエンス／協働／調和／社会／物語／充実／完成／謙遜／忠実／捨我精進／いのち／堅忍不拔／忠恕温和／創造／考える心／徳と知／受容力／行動力	1

見開きと教育方針に使われていた言葉として最も多いのが「未来・夢」(9回)で、これからの人生、個々の将来へ向けての希望やその実現に向けた準備といったイメージが語られる。次に「女性・女子教育」が8回カウントされているが、これはむしろ女子校にしては少ないと見ることができるのかもしれない。次に続く「豊か」(6回)同様に、他の言葉との組み合わせで、多様に、曖昧に使われている。宗教的教団によって設立された学校も多いため、設立の趣旨を反映して、「愛・友愛」(5回)や宗教精神の言葉(5回)なども比較的多く見られた。今後、共学校や男子校と比較することで、その差異、女子校の特徴はさらにはっきりしてこよう。「愛」「豊か」「品格」「清心」など抽象的で曖昧、女性を意識したような綺麗な言葉が比較的多い一方、現代社会の方向性に合わせて「グローバル」「世界」「協働」「サイエンス」などの言葉も使われるようになっている。「未来・夢」と

「女性・女子教育」に関するタイトル（キャッチコピー）の一部は以下の通りである。

「未来」・「夢」

- ・一人ひとりの可能性を大きく育み、一人ひとりが輝く未来へ（安田女子）
- ・未来を切り開く大妻の教育（大妻女子）
- ・あなたに。未来のために。神戸女学院だからできること（神戸女学院）
- ・ともに踏みましょう、夢への第一歩（親和女子）
- ・自分らしく輝き、夢の実現を！（京都光華）

「女性・女子教育」

- ・女性を生きる、人を育てる（華頂女子）
- ・美しい女性を育む（武庫川女子）

「女性」と「豊かさ」

- ・「徳と知」が豊かに身についた素敵な女性（ノートルダム女学院）
- ・心豊かな女性をはぐくむ3つの理念（京都女子）

3) パンフレット全体の特徴

パンフレット全体の特徴については、①頁数の割合が多い、②パンフレットの初めの方で強調している、③学校の独自性としての紹介内容を、先述2名のデータ入力者が、パンフレットに強調している「特徴」として判断したものである。その結果、1校平均で

表9 パンフレットで強調している内容、学校の特徴（複数）

内 容	回数
コース別カリキュラム、専門コース	14
英語教育・留学制度、グローバル教育	11
キリスト教の宗教色	9
中高一貫カリキュラム	8
医薬・看護系理系の進学率、理系コース	7
進路指導の充実学力別指導	5
学力重視、学習指導の取り組み、受験体制	5
クラブ活動の充実、学校生活の楽しさ	5
附属大学との連携	4
伝統・歴史のある校風	3
難関大学の進学実績	3
キャリア教育女性の社会進出	2
設備の充実	1

※全35校中

2.2 の特徴を入力した。パンフレットの構成を確認していくなかで、特に強調している内容、学校独自の特徴などを整理すると表 9 のとおりである。

最も多く特集されていたのは、コース別でのカリキュラムや学習指導（14 回）である。次に英語教育や留学制度について（11 回）、キリスト教の宗教色（9 回）であった。次に多いのは 6 年間の中高一貫カリキュラム（8 回）、薬学・看護などの理系コースの充実（7 回）、進路指導の充実や学力重視（5 回）などを特徴としている学校もある。

普通科のコース別カリキュラムについては、進路別コースの指導内容が充実していることをアピールしている学校が多く、特に、英語教育の充実や留学、グローバル教育など以下のような特徴がある。コース別の中で英語に特化している場合や留学を前提としたコースなど多様である。

- ・英語教育や海外の学校との連携など留学制度（東洋英和、広島女学院、大阪女学院、東京家政、跡見学園、昭和女子など）
- ・国際性やグローバル教育を目指している（大妻多摩、大妻中野、実践女子、聖心女子、大妻中野など）
- ・医療・看護系や理工系進学への対応などを強調している学校（大妻嵐山、和洋国府台、椋山女学園、ノートルダム清心、安田女子など）

教育・カリキュラム以外に取り上げられている特徴的なトピック・内容として、以下のようなものがある。

- ・多彩な学校生活やクラブ活動、行事（共立女子、園田学園、親和女子、広島女学院、樟蔭など）
- ・学校の伝統や歴史の詳細な紹介（同志社女子、神戸女学院、東洋英和など）
- ・キリスト教系学校における宗教行事の紹介（上記 3 校の他、平安女学院、藤女子、金城学院など）
- ・日本の文化（華道・茶道など）に関する学習の紹介（京都光華、華頂女子、京都女子）
- ・奨学金制度の充実（和洋九段） など

4) 系列大学への内部進学

系列大学については、程度の差こそあるものの 35 校中 26 校（74.3%）が言及をしている一方、全体の 4 分の 1 にあたる 9 校（25.7%）においては紹介がなされていなかった。系列大学への言及で最も多く説明されているのは、内部進学としての「推薦入学」であり、20 校（57.1%）が明記している。パンフレットの中で系列大学や短大の紹介を行っ

ているのは全体の3分の1にあたる12校(34.3%)、さらに詳しく系列大学の就職状況にまで言及している高校が3校(8.6%)あった(表10)。他大学への進学については、ほとんどの学校が前年度の国立大学や難関私立大学への進学状況や合格実績を示しており、難関校合格の実績をアピールしている学校も目立つ。進学・合格状況を示していない学校は4校であった。

表10 併設大学の掲載内容(複数)

内容	学校数
推薦制度、内部進学	20
大学・短大紹介	12
就職状況	3
全35校中	

併設(系列)大学・短大に関する紹介では、以下のような記述があった。

併設大学への入学

- ・推薦制度として1期専願、2期併願、3期専願がある(実践女子)
- ・併願型特別推薦制度の導入、外部の指定校推薦あり(共立女子)
- ・内部進学として合格を保証しながら他大学への進学を認める(跡見)

高大連携

- ・高校と大学が連携「大学入学前教育プログラム」(ノートルダム清心)
- ・大学キャンパス内の学校ならではの連携プログラム(宮城女学院)

大学紹介

- ・全国の女子大学でも、有数の規模を誇る教育環境がある(安田女子)
- ・全国の女子大最多の7学部を有する女子総合大学、4つの大学院研究科(椋山女学園)
- ・看護大学として国立病院機構と連携し、高度な看護教育を実現(福岡女学院)
- ・高い就職率、教員等採用・資格取得者数、看護学部開設(武庫川女子)

上の例にもあるように、大学進学において、系列大学と他大学への併願が可能であることを明示し、併設・系列大学への進学保証を強く打ち出す学校もある。内部進学を担保しながら、他大学受験、特に難関大学への進学実績をPRするような傾向は、10年くらい前から見られるようになったようだ⁶。

① 内部進学の現状

対象校35校のうち、併設・系列大学への進学状況として、2015年3月卒の卒業生数と内部進学数が明記されている学校をまとめると、表11に示す通り20校ある(但し、聖心女子と大妻中野を除く)。内部進学数をみると、人数が最も多いのは武庫川女子大学附属高等学校331人、京都女子176人であり、100名以上の生徒を内部進学で系列大学

に送り込んでいるのは4校のみである。逆に内部進学数が最も少ないのは神戸海星女子学院4人で、10人台も2校（東洋英和、大阪女学院）ある。取り上げた学校のうち、49名以下が11校と半数を占める⁷。ただ、こうした人数自体は学校規模・卒業生数にもよるので、以下では内部進学率（卒業生のうち併設校大学への進学率）を基準に検討していくこととする。

表11の上から14校のうち、大妻中野を除く13校は、卒業生数がパンフレットに明示されていた学校であり、内部進学者数を卒業生数で除して内部進学率を算出した。聖心女子については、内部進学者数は掲載されていなかったが内部進学率は示されていたので、内部進学数を算出した。大妻中野の場合、内部進学率のみ明示されていたので表に示すとともに、別資料『サンデー毎日特別増刊 高校の実力 2015年度版』から卒業生数を援用し、それをを用いて内部進学者数を逆算した。以上14校はパンフレットから内部進学率を算出できた学校である。表11の下から8校については、内部進学者数は掲載されていた

表11 併設（系列）4年制大学への進学状況

学校名	卒業生	内部進学数	内部4大進学率
聖心女子学院高等学校	122	56**	45.9*
共立女子第二高等学校	192	81	42.2
昭和女子大学附属高等学校	246	91	37.0
樟蔭高等学校	291	102	35.1
福岡女学院高等学校	148	51	34.5
跡見学園高等学校	254	60	23.6
大妻中野高等学校	241	42**	17.6*
広島女学院高等学校	219	34	15.5
大妻多摩高等学校	176	21	11.9
実践女子学園高等学校	262	28	10.7
共立女子高等学校	298	31	10.4
東洋英和女学院高等部	185	14	7.6
大阪女学院高等学校	335	17	5.1
神戸海星女子学院高等学校	144	4	2.8
武庫川女子大学附属高等学校	418	331	79.2
安田女子高等学校	237	115	48.5
京都女子高等学校	393	175	44.5
金城学院高等学校	354	92	26.0
東京家政大学附属女子高等学校	333	86	25.8
ノートルダム女学院高等学校	115	24	20.9
大妻高等学校	256	25	9.8
親和女子高等学校	244	21	8.6

* パンフレットに内部進学者数記載はなく、%のみ記載。

** 卒業生数と内部進学率より算出

注：大妻中野及び武庫川女子附属以下のパンフレットには卒業生数の記載がなかった。ここに網掛けで記している数字は、『サンデー毎日特別増刊 高校の実力 2015年度版』記載の2015年3月卒業生数であり、内部進学率もそれに依拠している。ただし、大妻中野はパンフレットに記載の内部進学率を記載している。

ものの、卒業生数が示されていなかった。よって、内部進学率を算出するため、先述のデータ資料（『サンデー毎日増刊号』）から卒業生数を利用することとした（表 11：網掛けの卒業生数）。パンフレットに記載してある学校の卒業生数とも合致していたので、信頼性は高いと判断した。以下、このようにして得られた 22 校の内部進学率を比較・検討していく⁸。

最も内部進学率が高い学校は武庫川女子大学附属高等学校である。ここで取り上げているのは 4 年制大学への進学率のみなので、短大も併設する武庫川女子大学の場合、実際の内部進学率はもう少し高くなる。この中で、50%を上回るのは武庫川のみであり、その他では高い順に、安田女子（48.5%）、聖心女子学院（45.9%）、京都女子（44.5%）、共立女子第二（42.2%）となり 40%台が 4 校、30%台は 3 校（昭和女子大附、樟蔭、福岡女学院）であった。卒業生の 30%以上が系列大学へ進学する学校は 22 校中 8 校（36.4%）で 3 分の 1 強に過ぎない。その他、20%台が 4 校、10%台が 5 校、10%未満は 5 校で、30%未満の合計は 14 校（63.6%）にのぼる。神戸海星女子学院は 2.8%、大阪女学院は 5.1%に過ぎず、ほとんどの生徒は系列校以外の大学へと進学している。

かつては、併設・系列大学・短大への内部進学率を大きな“売り”としていた併設（附属）高校が、大きく様変わりしているようである。このことは、3)でも確認したように、医歯薬、理系などの進路別コースや進学のためのカリキュラムに力を入れている学校が少なくないことにも表れている。併設大学についてあまり言及しない、あるいは併設大学への進学実績をあまり強調しない学校も見られる。18 才人口がもっと多く、進学競争もまだ厳しかった 10 年前、20 年前においては、エスカレーター式で進学できることを謳った附属や併設高校に進学することも多かったと思われるが、今日においては、卒業生の半分以上が併設・系列大学に進学する学校は極めて少なくなっている。

② 内部進学率の変化

併設大学進学離れの実態を確認するため、パンフレットの分析から少し離れるが、併設大学への進学が時系列でどのように変化しているかを検証することとする。これは、女子大学併設（附属）高校の戦略の変化を見ることでもある。

時系列比較のデータとして、ここでは 10 年前の実態との比較を行う。パンフレットを集めることは不可能なので、『サンデー毎日臨時増刊 高校の実力 2005 年版』を使用することとする。そこから表 11 に掲載している高校のみを取り上げ、併設大学への進学実数をまとめたものが表 12 である。ただし、ここに示されている内部進学者の定義は、“併設高校から推薦によって合格した者の数”であり、“卒業生全体での合格率”と定義されており、表 11 の実際の併設大学への進学者実数とは異なることに注意する必要がある。また、サンデー毎日（2005）の解説によると、「最近、内部進学を権利を保持したまま、

他大学の受験を認める制度を導入する学校が増えてきた」(403頁)として、共立女子や昭和女子を例示している。この頃から、併設校への進学を担保して、他大学への受験を認める学校が増加し始めたようである。以下、表11と12との数字の性質の違いを踏まえながら、併設大学への内部進学実態の変化を、時系列での比較により明らかにする。

表11と比較して気付く点は、比較しうる19校中、2005年の合格率が2015年の内部進学率を5%以上上回っているのは11校(10%以上7校)と多いことである。共立女子や昭和女子など、内部進学を保証したうえで他大学の受験を認める高校がまだそれほどなかったことを考慮すると、表12の合格率は、多くの高校において内部進学率に近い値ではないかと推察される。さらに、表11には掲載していないが、2015年までに10年で4校の短期大学が廃止された(昭和女子、跡見、京都女子、樟蔭)、併設短期大学への進学がごくわずかであったのであるが、2005年時点では短期大学への合格率も5%以上が7校、10%以上が3校ある。4年制と短大の合格率を合算すると、2015年との差はさらに拡大することとなる。

表12 併設(系列)大学への合格者数および合格率

学校名	卒業生	併設大合格者	併設4大合格率	短大合格率
聖心女子学院高等学校	125	89	71.2	
共立女子第二高等学校	204	106	52.0	+ 8.3
昭和女子大学附属高等学校	213	99	46.5	+ 28.6
樟蔭高等学校	426	174	40.8	+ 6.3
福岡女学院高等学校				
跡見学園高等学校	274	80	29.2	+ 0.7
大妻中野高等学校	268	131	48.9	+ 1.9
広島女学院高等学校				
大妻多摩高等学校	123	20	16.3	+
実践女子学園高等学校	305	68	22.3	+ 2.0
共立女子高等学校	446	189	42.4	+ 3.1
東洋英和女学院高等部	193	22	11.4	
大阪女学院高等学校	289	15	5.2	+ 7.6
神戸海星女子学院高等学校				
武庫川女子大学附属高等学校	476	384	80.7	+ 10.5
安田女子高等学校	225	90	40.0	+ 4.0
京都女子高等学校	419	177	42.2	+ 8.4
金城学院高等学校	380	238	62.6	
東京家政大学附属女子高等学校	382	151	39.5	+ 13.4
ノートルダム女学院高等学校	153	14	9.2	
大妻高等学校	266	60	22.6	+ 0.4
親和女子高等学校	325	22	6.8	

※1 2005年3月卒業生の進学状況

※3 データが掲載されていなかった学校は網掛けで示している

出典：毎日新聞社『サンデー毎日特別増刊 高校の実力 2005年度版』

※2 進学率ではなく併設校への合格率を示す

+印：短大が併設されている学校

さらにもう一つの気付くことは、すでに 2005 年時点で、高校によって大きく併設大学への比率が異なっているということである。19 校中、10%未満（4 年制のみ）が 3 校、10%台が 2 校、20%台が 3 校で、30%未満が 19 校中 8 校（42.1%）となっている。系列大学への進学者が少ない併設高校については、併設の学校が短大を主体とするものであったり、4 年制大学が高校よりかなり遅れて設立されるなどして、先に高校が進学校化したというケースもある。あるいは、法人による高校と大学の結びつき方、連携の仕方やその変化によって内部進学割合に差異が生じていると思われる⁹。そうした要因の検討は重要であるが、本稿での目的とは異なるので、別稿において行うこととする。

5) 女子教育の意義

i) 語られた女子教育の意義や方針

35 校のパフレットを調べた結果、「女子教育」の意義や方針について言及していたものは 20 校、そのうち学校長メッセージでの言及が 9 校、教育方針や教育目標としての言及が 9 校、学校の歴史や建学の精神のなかでは 2 校であった。「女子教育」として述べられている内容は、①現代社会での女性への期待（将来像）、②女子教育の特性、③女子教育としての方針や伝統、の 3 つに分類することができると思う。但し、これらは重複して述べられている場合が多い。

①まず「女性への期待（将来像）」としては、今日、“男女共同参画”“一億総活躍社会”“女性活躍推進”などの言葉を政府が使用・喧伝し、女性の社会進出が求められ、期待されている現状を背景として「社会で活躍する」「社会進出」「社会に貢献する」などの文言が 20 校中 17 校と、ほとんどの高校で述べられている。現代社会の特質は、「グローバル化」「男女共同参画社会」「多様化・複雑化」「国際化」といった言葉で捉えられ、このように変化してきた社会に対応できる女子教育が必要であることが強調されている。そのため、これからの女性に求められている役割や能力としては、「スペシャリスト」として専門分野をもつなど「キャリア」を形成することが強調され、そのために集団で「コミュニケーション能力」を発揮し、「リーダーシップ」をとること、さらに英語能力の向上やグローバル化に対応できる「国際性」の育成が説かれている。具体的には、以下のような言説があった。

- ・コミュニケーション能力やリーダーシップを養いライフキャリアを築く（京都光華）
- ・実社会で求められる現場対応能力やリーダーシップ（和洋国府台）
- ・様々な分野でのスペシャリストになれる女性（安田女子）
- ・自らグローバルに活躍し未来設計する女性（昭和女子）
- ・グローバル化に対応できる人材、社会に貢献できる人材（武庫川女子）
- ・豊かな国際性を身につけた現代社会で通用する女性（和洋九段）

②次に「女子教育の特性」としては、旧来からの女性に求める資質や心情といった用語、例えば「美しい」「愛」「豊かな感性」「おもいやり」「感謝」などが使われている。また、「奉仕」「品格」「母親の資質」「礼儀作法」といった言葉で女性としての望ましい役割や態度を示している。

- ・美しさと強さを兼ね備え自分らしく歩いていく女性（華頂女子）
- ・日本の伝統文化、礼儀作法を身につけた女子教育（和洋九段）
- ・真の美しさを身につける女性、恥ずかしくない立居振舞（共立女子第二）
- ・次代を担う子供を養育する母親の資質、豊かな教養、自立の心、家庭経営も含めた自営の力（実践女子）
- ・女性ならではの豊かな感性や思いやりを大切に（藤女子）

③女子教育の方針や伝統としては、男女共学にはない女子校ならではのメリットがあることを示したり、建学時からの伝統や宗教に基づいた人格教育を明示している学校がある。

- ・キャンパス内に年代ごとのロールモデル、多様な進路選択ができることが魅力（東京家政）
- ・「女性学」の科目を設け女性としての生き方を考える（園田女子）
- ・社会的地位が低い時代からキリスト教に基づく女子教育の伝統（宮城学院）
- ・社会のあらゆる方面で「奉仕」をする人を育て上げる（同志社女子）

以上見てきたように、女子教育の意義を示そうとする中、一方では現代社会が求めるグローバル化、国際化する社会へ適応し活躍できる女子の育成を掲げ、他方で伝統的な日本女性としての作法や礼儀、美しさを重んじ、このような意味で男性と異なる女性性を強調していることがうかがえる。

ii) 学長メッセージにみる育成人物像

「学校長のメッセージ」のタイトルに使われている単語については前述したが、語られている内容のなかには、教育目標・方針、女子教育の意義、さらには育成する人間像について言及している。19校の学校長のメッセージから「育成人物像」についての内容を抽出し、コード化して集計を行った（図3）。その結果、最も多く使用されている言葉は「女性・女子教育」（14回）であり、当然ながら女子教育ならではの育成を強調している。例えば、「女性ならではの感性」「しなやかにのびやかに個性を發揮できる女性」「職業人としても有能な女子」「女性の自立」「女性の時代」など、その内容はさまざまである。女子

のみを対象とした学校であるので、ある意味こうした言葉が頻出するのは当然でもある。「しなやかさ」や「女性ならではの」といった言葉は曖昧であるが、女性の特性や独自性を強調するために用いられているものと思われる。

次に多用されていたのが「グローバル・国際性」(10回)で、“2) 見開き頁の内容”でもこうした言葉がよく用いられていた。グローバル化が進行し、官民挙げてさらなる進展が強調されていること、さらに外国語や国際性に対して強い関心をもつ女子を惹きつける意味もあってか、メッセージでも多くの学校がこれらの言葉を強調している。「社会貢献・活躍」(8回)がこれに続き、グローバルとも関連させて、女性が社会的に活躍し、社会に貢献できる人物像を掲げている学校が多い。「一億総活躍社会」「女性活躍促進」などのキャッチフレーズが踊り、女性の社会進出を促そうとしている今日の潮流を捉えている。

続いて、「教養・知識・学力」(6回)、「個性や自分らしさ」(6回)、「行動力・意欲・生きる力」(5回)といった言葉が比較的多く使われており、校長メッセージの中で目指されている女子像を育成しようとしていることがわかる。「愛・優しさ・思いやり」や「奉仕」「品性・美しい」などの女性を意識した単語は使われる回数は少なく、さらに「礼儀作法」「母親の役割」などのいわゆる「良妻賢母」を示すような言葉は少なかった。全体の印象としては、“見開きページの内容”と大きく異ならない。具体的な文言は、図3の下に列挙している。

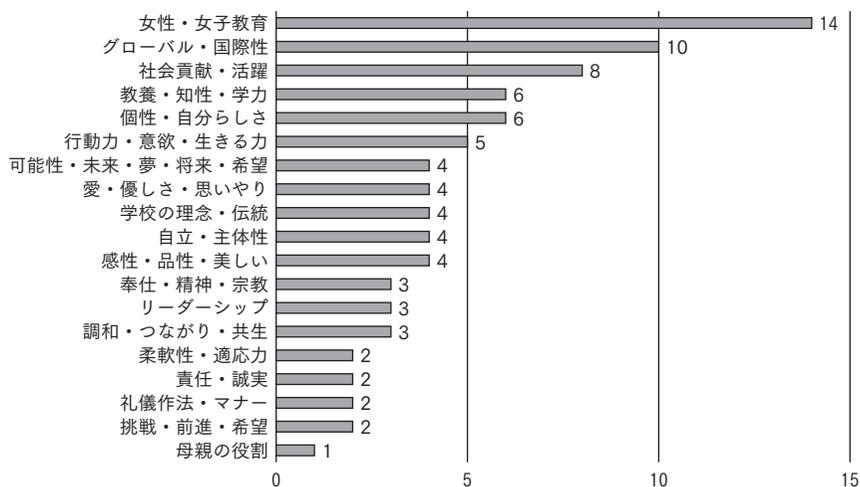


図3. 学校長メッセージの育成人物像の言及数

メッセージ内容の具体的文言

- ・「女性の自立」の道を、今度はさらに広い世界へと伸ばし、国際社会を舞台として、人類のために貢献できる女性を育成する (大妻中野)

- ・英語教育と海外交換留学を通し、豊かな国際性を身につけた現代社会で通用する女性の育成。…しなやかにのびやかに個性を発揮できる凛とした女性を育てる（和洋九段）
- ・「自らグローバルに活躍する未来設計ができる女性」さらには、「グローバル・リーダーへと挑戦する女性」の育成（昭和女子）
- ・21世紀は間違いなく「女性の時代」。同時にグローバル化に対応できる人材、本当の豊かさのために社会に貢献できる人材の育成（武庫川女子）
- ・社会や子どもたちの変化を踏まえて、内面から大切な自分を鍛えて、グローバル社会で女性の力を思う存分発揮できる力を育成する（京都光華）
- ・地球規模でグローバルな活躍が期待される現代社会において、…女性としての感性と女性ならではの視点をもった時代のニーズにこたえられる人間の育成（東京家政）
- ・次世代を育む母の役割の普遍的な重要性を説くにとどまらず、職業人としても有能な女子を育てる（大妻女子）

4. まとめと課題

本論文では、女子大学附属あるいは併設の高校 35 校が発行しているパンフレットを対象として、その内容分析を行ってきた。女子大学に併設された高校の約半数くらいを対象とできたので、ある程度の傾向は把握できたと思う。以下、これまで行ってきた分析結果から得られた知見を 3 点に絞って整理し、今後の研究課題を示しておく。

まず、女子大学の附属あるいは併設高校のパンフレットを概観して特徴的であったことは、中高一貫教育の教育理念や方針、あるいは教育・指導方法や将来的な進路選択の多様性が強調されていた一方で、女子大学の併設（附属）高校としての理念やメリットを示す内容は非常に少なかった点である。そのため、ほとんどの学校において、併設大学とは無関係に大学進学に際しての希望進路（専攻）や学力に応じたコースを設けてきめ細かい指導をする、あるいは国立や有名私立大学への進学実績をアピールポイントとしている場合も多かった。特に、学力、関心、進学希望、将来像などが異なる生徒に対して「個別に丁寧」指導をしていくことに強調点を置く学校が少なくない。生徒募集に係る戦略として併設大学以外の有名大学への進学が重要視されてきていることが分る。こうした傾向はますます加速して、高校とその併設大学の互いの独立性が強まっていくのか、あるいはこれは女子大学併設（附属）高校における特殊事情であって、共学大学の附属高校とは異なるのか。このことを明らかにするために、本研究で収集した共学及び男子校のパンフレットと比較検討していくことになる。

第二は併設大学への内部進学についての捉え方、今後のあり方についてである。35 校中、9 校で併設大学への言及がなされていなかった。また併設校への内部進学者あるいは

率が明らかにされているのは 22 校で、その他の学校では内部進学についての具体的な数字が示されていない。内部進学率が把握できる高校のみを対象とした場合、卒業生の半数以上が併設大学に進学する学校は 22 校中 1 校にすぎず、一方で 20%未満が 10 校、30%未満になると 14 校となって半数を超える。このように、10 年前、2005 年の内部生合格者率（進学率ではない）と比較してみても、高校から併設大学への進学は減少傾向にあることが示された。女子大学とその併設中高の関係は近年大きく変化してきており、少子化が急速に進行するなか、中学・高校は併設の女子大学に内部進学生としてエスカレーター式に送り込むというやり方では生徒募集が困難となり、その相互依存関係から独立し、進学校化するなど独自の運営方針を取るようになってきている。その一方で、強制という形をとらない内部進学の保証は、人を集める道具にも変化しうる。併設大学への内部進学を保証しながら他大学受験を可能とすることで、受験生集めの魅力づくり（エサ）として併設大学との関係を利用しようともしている。併設大学の人気が高くなれば、より効果的となる。サバイバル・ストラテジーの観点からは、これが最も顕著な方策である。こうした関係性の変化やそれを促す要因（例えば、学校法人の方針による大学と併設高校の連携の強さ（あるいは独立性）、大学と高校の設立順、中学・高校および大学の入試難易度、大学の構成学部など）について、今後、なさらなる量的・質的な調査分析が必要となる。

第三は、学長メッセージや卒業生紹介やメッセージなどで語られる文言についてである。「女子教育の意義」については、学校長のメッセージや教育方針の中で語られており、「グローバル・国際性」「社会貢献・活躍」「リーダー」といった言葉を伴いながら社会で活躍する女性を期待している内容が多い。これに呼応するように、社会で活躍する先輩の紹介として、女性職業の定番である教員・保育士・看護師などの専門職の他、医師、一級建築士、弁護士など、理系・文系を問わず、高度な専門職として社会の第一線で活躍する人の紹介とメッセージを掲載しており、これが受験生へのアピールポイントとして位置づけていることが分る。校長メッセージでは、こうした自立志向を強く述べると同時に、“女性らしさ”を表すものとしてよく使用される「思いやり」「美しい」「奉仕」などといった言葉、学校・校長によっては「母親の資質」「女性の品位」といった言葉も使用して女子教育の意義が語られていた。女子教育の特性や意義を強調しようとする際、男性との差異ということで、女性にしかできない子どもを産み母親になることや、女性の美德とされてきた思いやり、美しさ、品格といった紋切り型の言葉を使った表現になっているようにも思われる。職業志向や自己実現、あるいはグローバル化への準備は今後、両性ともに求められていくであろうが、女性教育や女性のための教育のよさを表す際に、女性に対してはこうした言葉が不可避的について回るのか、あるいは新たな言葉が使われるのか、男子と変わらなくなるのか。もちろん、こうした言葉やそれらの内容自体に問題があると

いうのではない。問題は、なぜそれらの言葉が、女性の教育にのみついて回るのかということである。宗教を含め多様な背景を持つ学校法人によって、女性観など考え方の違いもあろう。こうした点も踏まえつつ、今後は男子校、あるいは共学校との比較による検討を進めるとともに、使用される表現や言葉の変化についても注視していきたい。

注

- 1) まだ途上ではあるが、これまで以下のような成果を上げている。
 - ・安東由則 2016、「私立高校に関するデータ集 (1)」『研究レポート』46号、pp.1-35.
 - ・安東由則 2016、「私立高校に関する文献目録：主として1990年以降」『研究レポート』46号、pp.35-51.
 - ・森永直樹・安東由則 2016、「近畿地区における私立高校の入試動向と進学戦略（平成27年度特別研究・私立中高研究会講演記録）」『研究レポート』46号、pp.53-82.
 - ・増田稔・安東由則 2017、「大妻中学・高等学校についてのインタビュー：学校改革の取り組み」『研究レポート』47号、pp.101-125.
- 2) 厚生労働省「平成28年(2016)人口動態統計(確定数)の概況」(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei16/index.html>)
- 3) 日本私立学校振興・共済事業団 (<http://www.shigaku.go.jp/files/shigandoukouH29.pdf>)
- 4) 各高等学校のHP参照(2018年2月28日現在)
 - 早稲田実業 (<http://www.wasedajg.ed.jp/introduction/history.html>)
 - 早稲田本庄 (<https://waseda-honjo.jp/html/guide/history.html>)
 - 明治大学附属 (http://www.meiji.ac.jp/ko_chu/about/history.html)
 - 法政大学附属 (<http://www.hosei.ac.jp/NEWS/newsrelease/120529.html>)
 - 法政国際 (<https://kokusai-high.ws.hosei.ac.jp/education/>)
 - 広尾学園 (<http://www.hiroogakuen.ed.jp/info/history.html>)
 - かえつ有明 (<http://www.ariake.kaetsu.ac.jp/contents/outline/gakuen/#a03>)
 - 啓明学院 (http://www.keimei.ed.jp/n_aboutschool/aboutschool.html)
 - 関西学院 (https://www.kwansei.ac.jp/hs/news/2016/news_20160829_012574.html)
 - 高槻 (<https://www.takatsuki.ed.jp/annai/ayumi>)
 - 横浜山手女子から共学化した中央大学附属横浜や洛南については、『共学』化で伸びる高校『別学』支持派もいるが…『共学』進む西、『別学』優位東『週刊朝日』2014年6月6日号、p.36.
- 5) 政府統計の窓口「学校基本調査 年次統計」(<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003147040>)
- 6) 毎日新聞(2005)『サンデー毎日特別増刊高校の実力 2005年度版』には、以下のような解説が

ある。「…最近、内部進学の特権を保持したまま、他大学の受験を認める制度を導入する学校が増えてきた。とくに制限を設けずに他大学受験を認めているのは、共立女子、…昭和女子大付昭和…など。…併設大にない学部・学科のみと条件を付けて他大学受験を認めるのは日本女子大付などである。そのほか、一定の成績を取った者、などの条件を付けるところもある。これらの学校は、併設大の合格を確保してから受験に臨むため、精神的余裕をもって志望大学へチャレンジでき、進学実績を伸ばしている傾向がある。他大学受験を認める付属校は今後も増えることが予測される」(403頁)。中高への受験生集めのためもあってか、他大学受験を認める高校が増加してきたのがこの頃であったようだ。これについては、具体的な例としては、押谷・鈴木(2014)、増田・安東(2017)などを参照。

7) 内部進学者数によるカテゴリー別の表を下に示す。

別表1 内部進学者数

内部進学者数	学校数	%
24名以下	6	27.3
25～49名	5	22.7
50～99名	7	31.8
100～149名	2	9.1
150名以上	2	9.1
計	22	100.0

8) 下の別表2の数字は、合格率であり、実際の進学者ではない。この数字が正確なものであれば、これと表11を比較することで、内部進学が保証された者の数と、実際の内部進学者数の乖離を、学校ごとに確認することができる。なお、学校によっては、内部推薦を受けずに、あるいは併設大の希望学部へ推薦されなかったため、他大学と併設大学の一般試験を受験し、併設大学に入学する場合もあるようだ。

別表2. 女子大学附属高校の内部進学者数および内部進学率

校名	卒業生	内部合格者	内部合格率	校名	卒業生	内部合格者	内部合格率
十文字学園女子	337	22	6.5	共立第二	192	107	55.7
川村学園	92	23	25.0	恵泉女学園	188	11	5.9
聖徳	166	33	19.9	昭和女子	246	161	65.4
取手聖徳女子	122	24	19.7	白百合	177	49	27.7
和洋九段女子	223	6	2.7	実践女子	262	59	22.5
和洋国府台女子	324	50	15.4	札幌聖心	39	14	35.9
跡見学園	254	3	1.2	不二聖心	66	41	62.1
大妻	256	2	0.8	小林聖心	110	21	19.1
大妻多摩	176	0	0.0	清泉女学院	172	9	5.2
大妻中野	241	28	11.6	東京家政	330	81	24.5
大妻嵐山	161	37	23.0	東京家政学院	97	29	29.9
共立	289	109	37.7	東京女子体育	126	9	7.1

校名	卒業生	内部合格者	内部合格率
日本女子	368	301	81.8
日本女子体育	172	25	14.5
鎌倉女子	177	53	29.9
相模女子	320	44	13.8
女子美術	183	113	61.7
東洋英和	185	34	18.4
金城学院	354	176	49.7
椙山女学園	428	280	65.4
名古屋女子	345	54	15.7
京都女子	393	145	36.9

校名	卒業生	内部合格者	内部合格率
ノートルダム女学院	115	35	30.4
樟蔭	291	87	29.9
梅花	186	45	24.2
甲南女子	170	17	10.0
松陰	185	56	30.3
園田学園	172	31	18.0
武庫川女子	417	331	79.4
清心女子	153	35	22.9
筑紫女学園	437	17	3.9

※ 卒業生数は2015年3月卒業生

出典：毎日新聞社 2015、『高校の実力完全版（サンデー毎日特別増刊2015年度版 大学入試全記録）』

9) 大阪女学院の場合、併設大学としては長らく短期大学のみであり、4年制が創設されたのは2004年。東洋英和も同様で、4年制の設立は1989年であった。高校と大学の連携の変化の例では大妻を挙げることができる。大妻高等学校の場合、1991年の併設4年制への進学者率は28.8%、同短大が37.3%で、両者合計で66.1%であった。それが、1993年から内部推薦の大幅な見直しが行われたため、他大学への進学へと大きく舵を切ることになり、2001年の併設4年制11.5%、同短大1.5%まで低下した（安東 2017, 105頁）。

引用文献

- 安東由則 2016, 「私立高校に関する文献目録：主として1990年以降」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）46号, pp.35-51.
- 安東由則・鎮朋子 2008, 「女子大学の自己像：大学案内パンフレットと自己点検・評価報告書の分析から」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）38号, pp.121-156.
- 安東由則・大竹綾子・藤村真理子 2007, 「女子大学および女子学生に関するデータ」友田泰正・安東由則編『「女子大学の存立意義に関する調査研究」報告書』pp.463-551.
- 井上靖子・大西加愛・難波美都里・堀内圭子 1996, 「女子大イメージの虚と実：パンフレットは何を語るのか」『人間関係論集』（大阪女子大学人間関係学科）13号, pp. 147-189.
- 橋本鉦市・小原明恵・加藤靖子 2017, 「現代女子大学の自己認識に関する一試論：学長メッセージの内容分析」『名古屋高等教育研究』17号, pp.81-99.
- 毎日新聞社 2005, 『サンデー毎日特別増刊 高校の実力 2005年度版大学入試全記録』毎日新聞社
- 毎日新聞社 2015, 『サンデー毎日特別増刊 高校の実力 2015年度版大学入試全記録』毎日新聞社
- 増田稔・安東由則 2017, 「大妻中学・高等学校についてのインタビュー：学校改革の取り組みを中心に」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）47号, pp.101-125.
- 森山由紀子 2005, 「女子大学 HP 学長メッセージに見る、女子大学とジェンダー」『総合文化研究所紀要』（同志社女子大学）22号, pp.5-15.

押谷由夫・鈴木円（友田正泰・安東由則編）2014, 「平成 25 年度 大学教育研究会講演記録（2）：大学と中学校・高等学校との連携の実際」『研究レポート』（武庫川女子大学教育研究所）44号, pp.23-56.

佐野享子 2002, 「私立大学の個性の特質とその戦略意図に関するマーケティング論的研究：女子大学における学生募集に焦点を当てて」『筑波大学教育学系論集』26号, pp.1-14.

田野瀬良太郎 2015, 『田舎の無名高校から東大、京大にバンバン合格した話：西大和学園の奇跡』主婦の友社

漆紫穂子 2010, 『女の子が幸せになる授業：28 プロジェクト』小学館

全国学校データ研究所（東京教育研究所など）編 各年, 『全国学校総覧』原書房（東京教育研究所）

※ 執筆分担について：執筆については安東が“はじめに”及び1節、2節、4節を担当し、橋詰が3節（但し「4）系列大への内部進学率」は安東）の執筆を担当した。橋詰が執筆した部分については、安東が執筆責任者として加筆・修正を加えた部分がある。

※※ネット資料については、2018年2月28日と3月1日に全て所在の確認を行った。

付記 本研究は、武庫川女子大学より助成を受けた特別研究「私立中学・高等学校の動向とサバイバル戦略」（2015年度から継続）の成果の一部である。

資料 分析資料一覧（2016年度用パンフレット）

No.	学校名	地域
1	藤女子中学・高等学校	北海道
2	宮城学院高等学校	東北
3	東洋英和女学院中学部・高等部	関東
4	和洋国府台女子中学校・高等学校	関東
5	和洋九段女子中学校・高等学校	関東
6	昭和女子大学附属中学校・高等学校	関東
7	大妻中学高等学校	関東
8	大妻中野中学校・高等学校	関東
9	大妻多摩中学・高等学校	関東
10	大妻嵐山高等学校	関東
11	実践女子学園 中学・高等学校	関東
12	共立女子中学校・高等学校	関東
13	共立女子第二中学校・高等学校	関東
14	跡見学園中学校・高等学校	関東
15	東京家政大学附属女子高等学校	関東
16	聖心女子学院初等科・中等科・高等科	関東
17	金城学院中学校・高等学校	中部
18	椋山女学園高等学校	中部
19	京都女子高等学校	関西
20	同志社女子中学校・高等学校	関西
21	ノートルダム女学院中学・高等学校	関西
22	京都光華中学校・高等学校	関西
23	華頂女子中学校・高等学校	関西
24	平安女学院高等学校	関西
25	大阪女学院中学校・高等学校	関西
26	樟蔭高等学校	関西
27	神戸女学院中学部・高等学校	関西
28	神戸海星女子学院中学校・高等学校	関西
29	園田学園中学校・高等学校	関西
30	親和中学校・親和女子高等学校	関西
31	武庫川女子大学附属中学校・高等学校	関西
32	ノートルダム清心学園 清心女子高等学校	中国
33	広島女学院中学・高等学校	中国
34	安田女子中学校・高等学校	中国
35	福岡女学院中学校・高等学校	九州
	個別に資料請求で入手	